

上代の「うち」と「なか」

—— 範囲と位置 ——

小 澤 颯 太

一 はじめに

現代日本語において類義語とされている名詞「うち」と「なか」は、古代日本語においても「内」「中」といった表記があらわれている。しかし、「中」という表記に関しては、古くから「うち」「なか」両様に訓まれることが知られている。例えば、鎌倉時代中期に書写された『観智院本類聚名義抄』には次の記述が見られる。

中 音忠 ウチ・又去声、ナカ・アタル・ヤブル・ナカゴ・ナカゴロ・アフ・アヒダ・ソコナフ；和チウ^{注1} (仏上)
上代の『萬葉集』においても「うち」と訓まれている「中」は確認できる。

A 世の中は(世中) 常かくのみと 思へども かたて忘れずなほ恋ひにけり (卷十一・二三八三)
B 沖つ波 寄する荒磯の なりのそは 心の中に(心中) 疾となれり (卷七・一三九五)

C やすみしし 我が大君の 敷きませる 国の中には(国中者) 都し思ほゆ (卷三・三三九 大伴四綱)

右にあげた例のうち、AとBはそれぞれ「よのなか」「このころのうち」と訓まれており、諸注釈においても異同は見られない。しかし、Cの例については、本文を引用した新編日本古典文学全集(以下、『新編全集』)では「くにのうち」となっている一方で、近世以前の注釈書や諸本の訓は「くにのなか」となっている。こういった異同は一見些細なものに思われがちだが、二語が基礎的な語彙に含まれるだけに検討してみる価値はある。

この問題に関する先行研究としては、まず津之地直^{注2}(一九七二)があげられる。津之地(一九七二)は『萬葉集』における「なか」の用例を概観し、一部「中」表記の訓み分けにも言及している点で本稿に関する直接的な先行研究と位置づけられる。だが、他の空間語彙「上」「下」に関しても扱っている都合上、扱われていない用例も多く、「うち」との訓み分けの基準についても明確なものが示されていない。これに対して、通

時的な観点から「うち」「なか」に関する考察を行ったのが日野資純である。日野の一連の研究は語彙史の側面から二語の意味記述を段階に進歩させた。また、これをふまえた研究として、『源氏物語』における二語の使い分けを考察した斎藤達哉^{注4}（一九九五）も注目される。以上の二つの論では、「中」字における「うち」「なか」の訓み分けという問題に対して、二語の意味の相違という点から一定の基準を示している。こうした二語の意味研究の進展によって、津之地（二九七二）以来の、『萬葉集』の訓みと表記に関する研究も再検討する必要がある。具体的には、これらの研究で示された意味定義が時代の遡る『萬葉集』においてもあてはまるのか、「中」の完全な訓み分けが可能かといった点について考察してみたい。

二 問題の所在と意味記述史

ここでは「うち」「なか」の意味について、これまでどのような記述がなされてきたのかをいくつかの辞典類を中心に確認していきたい。まず、二語における基本的な意味の違いを簡潔に述べたものとして『岩波古語辞典』（一九七四）（以下、『岩波』）を見てみたい。^{注5}

古形ウツ（内）の転。自分を中心にして、自分に親近な区域として、自分から或る距離のところを心理的に仕切った線の手前。また、囲って覆いをした部分。（中略）ウチは、中心となる人の力で包み込んでいる範囲、という気持ち強

く、類義語ナカ（中）が、単に上中下の中を意味して、物と物とに挟まれている間のところを指していたのと相違していた。古くは「と（外）」と対して使い、中世以後「そと」また「ほか」と対する（「うち」の項）

一方で、「なか」については「中心」を意味する一音節語「な」に「在処、住処」などの接尾辞「か（処）」がついたものとしており、二音節目の母音変化によって成立した「うち」とは異なる。そして、これらの語源にもとづいて導き出される二語の原義は異なったものであったとしている。

二語の意味分類に関して、最も詳細な記述がなされているのは『古典基礎語辞典』（二〇一一）（以下、『古典』）である。以下、本稿の考察に関連する語釈を引用する。^{注6}

【うち】

①空間的用法

⑦自分の世界とする空間領域。①周囲を囲まれたり覆われたりしている空間。簾や屏風などで区切られた内部。

邸内。室内。また、人の体、器物、霞の中など。

②時間的用法

⑦一定期間の範囲内。①《「うちに」の形で》ある動作や状態が続いている時間の範囲内。あいだに。

④心・言葉・夢など、抽象的、心理的なものの内部。

⑤同類の人やものごとと認められる範囲内。枠内。

【なか】

①空間的用法

⑦二つのものに挟まれていて端でない所。また挟まれている物や人。⑧一つのを三つに区分したときの中間の位置や部分。⑨多くのものが密集している所の、外縁ではない所。⑩同類のものがいくつも並んでいる、その中間にあるもの。また、何段階もあるものの中位。⑪外側、表側を囲まれ、覆われている内部。ウチに近い用法。⑫一面に広がり続けている所の端でない所。

③時間的用法。

⑬一定の時間帯の中で端でないところに位置する時間。「夜中」「半ば」など複合語の形のほうが意味がわかりやすい。⑭一つの期間を三分した、中間の時期。⑮言葉・感情・夢・経・楽・香り・占いなど、長さや広がりをもつ抽象的なものの内部。途中。

⑯《「なか」に「なかの」の形で》同類のものが多く存在する場を示し、そのあとである特徴をもつものを特にとりあげていう。…のうちの一。…のうちで、とりわけ。

以上の意味用法の中には、上代に用例がないものも含まれるが、原義に近いと思われる二語の空間的用法についても様々な小分類が確認できる。以上に紹介した二つの辞典では、「うち」との境界が曖昧な「なか」の用法（『古典』の①②）が示されている。

日野資純（一九九一・一九九七）は『岩波』（一九七四）における上記の特徴をさして、自身の調査をもとに、「ナカについては、なお重要な意味特徴が見落とされているように思われ

る」（日野（一九九一）として両語における独自の意味定義を示している。

ナカ⇨明るくて広い空間中の一点を明瞭にさし示すのが中心の意味

ウチ⇨周囲を囲みおおわれた、閉鎖的な内部をさし示すのが中心の意味（日野一九九七・二頁）

そして、その「重要な意味特徴」が「うち」の「閉鎖性」に対する「なか」の「開放性」であるとしている。この「開放性」というタームは、「一点を明瞭に」という「なか」の意味特徴が、同時に「その周辺部や背景までも対照的に明らかにすること」を示している。それに対して、「閉鎖性」というタームには日本人の心理の底流にある「暗」だという意識があるとする。

しかし、一連の研究によって示された日野の定義は、後の斎藤（一九九五）によって、「閉鎖性と開放性の対応関係に無理が感じられ、「うち」の閉鎖性が何に基づくのが明確でないように思われる」（九八頁）として批判的に検討されている。

斎藤は前接する名詞（Nのうち／なか）または「N内、N中」における名詞N）や下接する助詞に関する傾向から、「うち」が「範囲」に関係する語で、「なか」が「数」に関係する語であるとしている。その上で二語の境界が曖昧な部分については、

「なか」が「中間」の意味ではなく、場所に関係している場合には、「うち」に類似する。「うち」との違いを言うならば、その文脈において「巖」「池」「海」「山懐」に「と

（外）」が対置されていないということがせいぜいであろう。

と慎重な考えを示している。このことから、斎藤は「場所に関係している」場合の「なか」については「数」との関係を見出せていないことがわかる。

本稿が調査の対象とする『萬葉集』においても、日野の定義では説明できない例が見られる。

1 庭中の(尔波奈加能) 阿須波の神に 小柴さし 我れ
は斎はむ 帰り来までに

(卷二十・四三五〇 若麻績部諸人)

2 桃の花 紅色に にほひたる 面輪のうちに(面輪乃字
知尔) 青柳の 細き眉根を 笑み曲がり…

(卷十九・四一九二 大伴宿祢家持)

この二例は「うち」「なか」の間で揺れが起こらない、一字一音表記の確定例だが、指向する空間「庭」「面輪」は、「開放的」「閉鎖性」の観点では解しにくい。1は一点を指しているとも解せるが、その根拠については必ずしも明確でない。2の「面輪」(顔)は輪郭で描かれた内部という意味では「うち」とするが妥当に思えるが、日野が「閉鎖性」というチームに込めたような「暗」の意識は見出し難い。また、後で確認するよう「夜中(よなか)」「春裏(はるのうち)」など時間的な意味をあらわす場合においても、この定義は十分に対応していないと思われる。こうした点から、より多くの用例に当てはまるような新しい定義を示す必要がある。

三 目的と方法

本稿は、和語としての「うち」「なか」の意味用法を明らかにすることを旨とする。具体的には、この分野の重要な研究である日野(一九九一・一九九七)の問題点を明らかにし、氏があまり言及していない上代の用例からその代案を示したい。手順としてはまず、上代から中世までの古典語の用例を確認し、先行研究の結果を再検討するところから始めたい。その後、そこで確認した点をもとにして上代の用例を概観する。検討する上代の用例については確定例の多い『萬葉集』を中心として、適宜記紀歌謡や続日本紀宣命など他の上代語文献も対象とする。用例の分析については、該当語と共起する語との結合関係に着目するという方法をとる。この方法は日野(一九九一・一九九七)や斎藤(一九九五)でも行われてきたものだが、従来の研究では前接の名詞のみに注目するものが多かった。しかし、本稿ではそうした句単位での考察だけではなく、共起する助詞や動詞といったより統語的な側面にも注目してみたい。また、本稿は中古の仮名表記資料を扱った二つの先行論とは異なり、漢字表記資料の『萬葉集』を主として扱うため、訓みが確定する例と確定しない例の線引きにも注意したい。そのためには、検討の前に確定例と位置づけられる用例の範囲を定めておく必要がある。その後に、確定例から見出される二語の意味をもとにして、訓みが確定しない「中」表記例を検討していくこととする。

なお、用例の調査については主に国立国語研究所『日本語歴史コーパス（CH）』を用いた。そのため、引用本文については基本的にCHが依拠するものを用いた。すなわち、『萬葉集』などの文学作品は『新編全集』のものを、続日本紀宣命については北川和秀（一九八二）『続日本紀宣命―校本・総索引』の本文をもとに校訂されたCHのものを用いた。また、CHに収録されていない記紀歌謡の引用については、新編全集『古事記』『日本書紀』の読み下しを使用した。

四 『萬葉集』、宣命等における「うち」「なか」の表記

CHを用いて、語彙素「内」「中」を条件に指定して検索をした結果、『萬葉集』中で「なか」は六十八例、「うち」は三十九例確認された。この他に、熟語単位で単一の語彙素と見なされている「夜中」（七例）、「海中」（二例）、「山中」（二例）、「野中」（二例）、「里中」（二例）（以上、「なか」の例）、「国内」（二例）、「垣内」（五例）、「垣内田」（一例）、「垣内柳」（一例）、「屋内」（一例）（以上、「うち」の例）もこれに加えられる。一方で、「河内」などの純粋な固有名詞と見なせるものや「中言」など熟語として特殊な意味を持つものは、「うち」「なか」の意味も見出せる可能性もあるが、今回の考察では除外した。また、「なか」の例六十八例のうち四十五例は「世の中」となっている。「よのなか」についてはその出自が定かなわけではないが、漢語「世間」の訳語とされているため、和語としての「なか」を

追究する本稿ではこれらの例も除外する。^{注7}

以上の操作から、今回の考察で対象とする例は「うち」四十九例、「なか」三十六例となる。これを表記別に分けて示す次の表1、2のようになる。^{注8}

表1 「うち」の表記別用例数

表記	用例数
内	21
中	13
裏	4
一字一音	11
計	49

表2 「なか」の表記別用例数

表記	用例数
中	26
仲	1
三更(義訓)	1
一字一音	8
計	36

『続日本紀』の宣命においては、「内大臣」「中衛」など官職や固有名詞に含まれる例が多いため、同様の基準から考察対象と見なせる例はあまり多くない。結果だけを示すと、今回は「うち」十例（「中」表記六例、「内」表記四例）と「なか」十二例（すべて「中」表記）を対象とした。加えて、記紀歌謡においては、古事記歌謡に「なか」が七例、日本書紀歌謡においては「うち」「なか」各二例を考察対象とした。

これらの例のうち、一字一音表記例や「内」「裏」「仲」表記の例は、いくつかの注釈書を確認してもその訓みに揺れが見られず、「中」表記のように「うち」「なか」の間で誤読が起きる可能性が小さい。^{注9} また、「三更」という義訓表記も後述するよ

うに、意味の面から「なか」という訓みとの結びつきが強いと言える。結果、これら「中」表記を除いた三十六例の「うち」と十例の「なか」は訓みが確定しているという意味で確定例と位置づけられる。

次に、二語に関して通時的に見出せる傾向を確認してみた。本稿では二語の文法的な機能を確認するために、奈良時代から鎌倉時代までの用例を対象として、二語の直後にくる格助

表3 「うち」と格助詞

格助詞/ 用例数	時代			総計
	奈良	平安	鎌倉	
に	26(53.1%)	605(62.8%)	390(53.1%)	1021
の	17(34.7%)	172(17.9%)	127(17.3%)	316
より	0(0.0%)	84(8.7%)	59(8.0%)	143
へ	1(2.0%)	37(3.8%)	78(10.6%)	116
を	3(6.1%)	35(3.6%)	50(6.8%)	88
にて	0(0.0%)	23(2.4%)	23(3.1%)	46
をば	0(0.0%)	4(0.4%)	4(0.5%)	8
と	0(0.0%)	3(0.3%)	1(0.1%)	4
で	0(0.0%)	0(0.0%)	3(0.4%)	3
つ	1(2.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1
ゆ	1(2.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1
総計	49	963	735	1747

表4 「なか」と格助詞

格助詞/ 用例数	時代			総計
	奈良	平安	鎌倉	
に	27(45.8%)	718(63.5%)	649(70.9%)	1394
の	23(40.0%)	230(20.3%)	86(9.4%)	339
を	6(10.2%)	132(11.7%)	62(6.8%)	200
より	0(0.0%)	28(2.5%)	47(5.1%)	75
へ	0(0.0%)	1(0.1%)	50(5.5%)	51
にて	0(0.0%)	13(1.1%)	12(1.3%)	25
と	0(0.0%)	7(0.6%)	3(0.3%)	10
つ	2(3.4%)	0(0.0%)	3(0.3%)	5
をば	0(0.0%)	2(0.2%)	1(0.1%)	3
で	0(0.0%)	0(0.0%)	2(0.2%)	2
ゆ	1(1.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1
総計	59	1131	915	2105

詞の種類を調査した。その結果を示したものが次頁の表3、表4である。(なお、%は小数第二位を四捨五入した数値であるため、合計は100%にならない場合がある。)

『源氏物語』を調査した斎藤(一九九五)では、格助詞「の」が「なか」より「うち」に付きやすい傾向を指摘しているが、平安期の用例数を見ても用例数・割合共に「なか」の方が多。しかし、それも微差の範囲内であり、全体として二語に

付きやすい格助詞に有意な違いは見出し難い。そのため、二つの表は二語の文法的性質の近似性をあらわしているようにも見えるが、その点についてはもう少し慎重に見ていく必要がある。

ここでは、両者に最も付きやすい格助詞「に」に注目してみた。「に」には空間名詞や時間名詞に付いて場所や時を表す用法があり、「うち」「なか」と親和性が見出せる。

そのため、格助詞「に」の意味やそれと共起する動詞などは、二語の意味を考える上でも重要になってくることが予想される。そこで次に、用例を上代のものに限定して「うちに」「なかに」と共起する動詞を調査した。表1、2から抽出した確定例のうち、確実に「に」格をとる（補読を含まない一字一音表記例）例を対象として共起する動詞を見てみると次のようになる。

表5 「うちに」「なかに」と共起する動詞^{注11注12}（うち／なかに十動詞）

動詞/用例数	うち	なか
暮らす	2	0
恋ふ	2	0
解き敷く	1	0
遊ぶ	1	0
隠る	1	0
結び据ゆ	1	0
鳴く	1	0
笑み曲がる	1	0
にほふ	1	0
隔る	0	2
隔つ	0	1
合へ巻く	0	1
逢ふ	0	1
立つ	0	1
あり(縮約形)	0	1
総計	11	7

表5からは、二つの形式と共起する動詞は一つも一致しない、つまり両者は相補的な分布となっていることがわかる。その違いを見ると、「なかに」「立つ」「隔つ」「あり」などの存在や静的な意味を持つ動詞（動作主の移動が少ない状態的な動作など）が多いのに対して、「うち」は「隠る」「遊ぶ」など動的な意味を持つ動詞が多いことに気づく。後者の動詞を含む構文^{注13}については、現代語では格助詞「で」が選択されることが多い。この特徴は、この分布が格助詞「に」の意味と何らか

の形で関係していることをうかがわせる。そう考えると、次のような仮説が想定される。

・「うち」と「なか」に付く場所をあらわす格助詞「に」は、現代語の「に」と「で」のように、存在、出現の場所をあらわすものと動きの場所をあらわすものに分けられるのではないか。

以上のことに基づいて個々の用例を見ていきたい。

五 確定例の検討

ここからは、前章であげた仮説を確かめるべく、「うち」「なか」の訓みが確定している確定例の詳細を見ていきたいと思う。

五―「に」格動詞と共起する「うち」「なか」

はじめに、表5で確認した訓みに揺れがない例をもとにして、先にあげた仮説を検証してみたい。

3 さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて

〔本那迦邇多知弓〕 問ひし君はも（古事記歌謡二十四）

4 山川を 中にへなりて（奈可尔敝奈里弓） 遠くとも

心を近く 思ほせ我妹

（卷十五・三七六四 中臣朝臣宅守）

5 母刀自も 玉にもがもや 戴きて みづらの中に（美都

良乃奈可尔） 合へ巻かまくも

（卷二十・四三七七 津守小黒栖）

6：我妹子と 二人我が寝し 枕づく つま屋の内に（媼屋之内尔） 昼はも うらさび暮らし（卷二・二二〇 柿本人麻呂）

7 梅柳 過ぐらく惜しみ 佐保の内に（佐保乃内尔） 遊びしことを 宮もとどろに（卷六・九四九）

8 桃の花 紅色に にほひたる 面輪のうちに（面輪乃字知尔） 青柳の 細き眉根を 笑み曲がり（卷十九・四一九二 大伴宿祢家持）

これらの「うち」「なか」は『古典』の分類においては空間的用法に該当する。ここでは、「に」格の意味に関連させると、「うち」「なか」が示す空間が文法的に見てどのような性質の空間であるかという点が問題となる。

そこでまず、分かりやすい例として3を見てみたい。この歌は倭建命の東征における一場面で詠まれたもので、倭建命が相模の国造に騙されて野に火を放たれた時の様子をあらわしている。ここでは、静的な「立つ」という動詞が用いられていることから、「火中」は「立つ」という状態が成立している固定された地点、倭建命が今現在存在している場所をあらわしている。これに対して、「うち」を含む6の例は「暮らす」という動きが行われる幅のある場所として「つま屋の内」を位置づけることができる。この二例は新編全集の現代語訳において、前者が「炎の中に立って」と「に」格をとる一方で、後者は「離れ家の中で昼はしよんぼり暮し」と「で」格をとるという違いが見られる。これは「玉」を「合へ巻く」固定された場所とし

て「みづらの中」がある5や、動作主や「細き眉根」（状態変化の主体）が「遊ぶ」「笑み曲がる」という動きを行う場所として「佐保の内」「面輪のうち」がある7、8においても同じ説明ができる。

以上の五例は「Nのうち／なか・Nうち／なか」という形式になっている。一方で、名詞Nの上に置かない4については現代ではあまり耳馴染みのない表現となっている。しかし、この「～を中に+動詞」という表現については、漢詩の表現を受けた和文的な表現であったという指摘がある。4は二人の男女の間に山や川が存在するといった意味になるが、この「なか」は「間（あいだ）」や「まん中」といった言葉で訳すことが可能である。そのため、この例についても男女を「へなる」状態を作る「山川」の固定された場所が問題になっている。

9 早速くの 野にも逢はなむ 心なく 里のみ中に（佐刀乃美奈加尔） 逢へる背なかも（卷十四・三四六三）
10 うぐひすの 鳴きし垣内に（鳴之可伎都尔） にほへりし 梅この雪に うつろふらむか（卷十九・四二八七 大伴家持）

9は「背な」に「逢ふ」という動きを行う場所として「里のみ中」を、10は「梅」が「にほふ」固定された場所として「垣内」を位置づけることも一見して可能である。特に9については、「人里の中で 逢うなんてあなた」（新編全集訳）と「で」格で訳されている。だが、古典語の「逢ふ」の性質を見てみると、「（相手を主語にして）やって来て偶然出会う。来合注15わせる。」

といった意味があり、現代語に比べて無意志的かつ受動性が強いという側面がうかがえる。9の歌も「里のみ中」で「逢ふ」ことの意味は、作者ではなく「背な」にあつたと考えられる。そのため、「逢ふ」ために動きを起こしたのは「背な」であり、作者にとつては「存在することによって起こる結果」が「逢ふ」ことだと解せる。そうなると、「逢ふ」も静的な意味を持つ動詞であり、出現を含蓄する意味で「に」格をとれる動詞と見なすことができる。10の「にはふ」は視覚的な美しさをあらわすため静的な意味の動詞に分類できそうだが、ここでは「咲いた梅」（『新編全集』訳）と変化の意味をあらわす。連体修飾成分の「鳴く」も動きをあらわすことから、「垣内」は動きや変化が行われる場所と言えらる。

ここまで見てきた例については、「に」格が静的な意味を持つ動詞と共起するときには「なか」、動的な意味を持つ動詞と共起するときには「うち」が出現する傾向が見られた。これは現代語における場所をあらわす格助詞「に」と「で」の使い分けと概ね一致していると言えらる。9、10の訳し方の問題などから、全ての例が「に」と「で」に置き換えられるわけではないが、この傾向は二語における文法的な機能の違いを示していると考えられる。

では、この文法的な機能の差とは具体的にはどう言いあらわせるだろうか。森田良行（一九八九）^{注17}では、「に」と「で」両方が使える自動詞文の表現性の違いなどに基づいて、場所をあらわす「で」格は「他にもいろいろな場所はあるが、それら

あちこちにまたがらず、該当地点、地域はここ」と場面的範囲を限定する」という意味があり、場所をあらわす「に」格には「その場所に定位する、もしくは存在する」という状態性の表現」という意味があるとする。その上で、二つの格助詞の違いについては、「行為の場所の限定意識」の有無に求められるとしている。

この指摘を参考にしてみると、この違いが先行研究などで指摘されてきた「うち」「なか」の意味特徴の一部とよく共通していることがわかる。「うち」があらわす空間はそれ以外の空間（そと）を前提に相対的な関係から限定していく形で決定している。それに対して、「なか」は「かみ」「しも」との関係の上では相対的と言えらるが、そこから派生するにつれて他を前提としない、独立した絶対的な空間をあらわす。つまり、ここでは「うち」や現代語で「で」格をとる空間名詞が「限定的な場所」と位置づけられる一方で、「なか」や「に」格をとる空間名詞は「排他的な場所」と位置づけられる。

これに加えて、「うち」には「周囲を囲まれたり覆われたり」（『古典』）という立体的な空間把握が認められ、「なか」には「同類のものがいくつも並んでいる、その中間」（『古典』）といった点的な空間把握が認められる。場所の「に」は存在・出現という静的な動作をあらわす点でこうした「なか」の点的把握との親和性が見出せる。この点も、動的な動作をあらわす場所の「で」が立体的な「うち」と親和するのと丁度対になっている。これらの特徴を語釈に見られる具体的な言葉で言い換える

次のような一般化が可能となる。

範囲：「うち」の空間的用法。他の空間との関係から限定

して定められる立体的な空間。

位置：「なか」の空間的用法。他の空間からは独立した点的な空間。

五―二 範囲と位置

次に、二語の確定例の中で、格助詞「に」が直接は下接しない例や別の格助詞をとる例についても「範囲」と「位置」の定義があてはまるか確認していきたい。

11 枯野を 塩に焼き 其が余り 琴に作り 掻き弾くや

由良の門の 門中の海石に（斗那訶能異句離理） 振れ
立つ なづの木の さやさや （日本書紀歌謡四十一）

12 庭中の（尔波奈加能） 阿須波の神に 小柴さし 我れ
は斎はむ 帰り来までに

（巻二十・四三五〇 若麻續部諸人）

この二例は「の」をとる例だが、直後に「に」格をとる名詞が現れている。「の」は連体助詞であることから、「庭中」「門中」は直後の名詞と合わせて「門中にある海石」「庭中にある阿須波の神（の祭壇）」などと訳せる。つまり、「に」格助詞と共にする「なか」同様、存在する場所を表している例に当たるとする。

13 …下土は 丹黒き故 三つ栗の その中つ土を（曾能那

迦都邇袁） かぶつく 真火には当てず 眉画き 此に

画き垂れ 遇はしし女… （古事記歌謡四十二）

14 待ちかねて 内には入らじ（内者不入） 白たへの 我

が衣手に 露は置きぬと （巻十一・二六八八）

以上の二例は二語の原義に近いとされている例である。最初に見た『岩波』にあるように、「なか」の原義は「上中下の中」であり、「と（外）」と対になる「うち」とは意味が重ならない。この13の例も、「かみ（上）」「しも（下）」に対する対象の「位置」を示していることと捉えることができる。14は移動動詞「入る」が使われているため、ここでの「に」は動きや存在の場所ではなく、着点をあらわしていると解せる。「入る」は外から内、「範囲」から「範囲」への移動をあらわす動きと解せる。

ところで、「に」格と「で」格における述語動詞の違いから空間把握を明らかにしていく本稿の方法は中右実（二九九八）^{注18}においても行われている。この論の中で注目すべき点は、「物理的空間」に見られる「に」「で」の相違が「時間的空間」「心理的空間」にも通じる点としてある点である。この考えに則れば、次のような例も「範囲」と「位置」で説明できるだろう。

15 旅なれば 夜中にわきて（三更判而） 照る月の 高島

山に 隠らく惜しも （巻九・一六九一）

16 人言を 繁みと妹に 逢はずして 心のうちに（情裏）

恋ふるこのころ （巻十二・二九四四）

17 春のうちの（春裏之） 楽しき終へは 梅の花 手折り

招きつつ 遊ぶにあるべし

（巻十九・四一七四 大伴家持）

15、17は「時間的空間」と位置づけられる例である。15は義

訓表記の例だが、「三更」は「五更の一つ。一夜を五等分した第三の時刻¹⁹」という意味であり、「何段階もあるものの中位」(『古典』)という意識がうかがえる。この表記からは、「よなか」が「夜という期間の範囲内」ではなく、「夜という期間における特定の位置」をあらわしていることが推測できる。それに対して、17は「位置」の解釈だと文意が通らない。こちらは、「春の間で」と訳されるような「範囲」の意味が妥当だろう。また、16、17の「うち」と訓まれる「裏」表記については中国六朝以来の俗語的表現とされている。注20「心理的空間」の例である16も、「恋ふる」という心的動作が行われる場という意味での「範囲」として「心のうち」を位置づけることができる。

このように、二語の意味特徴として見出せる「範囲」と「位置」は従来の定義では不明確であった時間的用法、心理的用法に関する例についても説明が可能である。

それらをふまえると、残りの確定例も「範囲」と「位置」の観点から解して困難なものは少ないように思われる。

18 近江の海 泊まり八十あり 八十島の 島の崎々 あり
立てる 花橘を 上枝に もち引き掛け 中つ枝に(伸
枝尔) いかるが掛け 下枝に ひめを掛け…

(卷十三・三三三九)

19 水門の 葦が中なる(安之我奈可那流) 玉小菅 刈り
来我が背子 床の隔しに
(卷十四・三四四五)

20 山越えて 海渡るとも おもしろき 今城の内は(伊麻
紀能禹知播) 忘れぬまじじ
(日本書紀歌謡一一九)

21 悔しかも かく知らませば あをによし 国内ことごと
(久奴知許等其等) 見せましものを

(卷五・七九七 山上憶良)

22 天の下の事をやたやすく行はむと所念し坐して、此の六
年の内を(六年乃内乎) 扱ひ賜ひ試み賜ひて、

(第七詔 聖武天皇)

18の「伸」字は、現代語では人間関係に関する意味で使われるが、『萬葉集』ではこの一例のみである。この例は13と同様に、原義に近いとされる「なか」にあてられている。21の「国内ことごと」は後に大伴家持も使用している表現で、「ことごと」は「どこもかしこも」注21と訳されている。「国」は立体的な空間ではないが、他(他国、外国)との関係から限定的に設定された空間と捉えることもできる。ここでは、「見せる」という動きの対象となる「範囲」として、「国内ことごと」を位置づけられる。

これらの例は、前接名詞「Nのうち／なか・Nうち／なか」という形式のNがどういう意味か(「開放」的か「閉鎖」的など)という観点だけでは判断できない。だが、述語動詞の意味と「範囲」「位置」の定義を用いると一貫した判断が可能となる。

六 「中」表記の検討

最後に二語に共通する表記となる「中」表記の例を見てみる。四、で示した表1、表2によれば、『萬葉集』の「中」表記に

において「うち」と訓まれているものは十三例、「なか」と訓まれている例は二十六例ある。すなわち、「なか」は「うち」に対して二倍の用例が確認できる。対して、続日本紀宣命は「うち」六例、「なか」十二例とこちらも二倍の開きがある。いずれの資料においても、「なか」と訓まれている「中」表記の方が多い。

ここでも「に」格と共起する動詞という観点から見てみると、表6の結果から殆どの動詞が相補的に分布している傾向がうかがえる。これに加えて、続日本紀宣命には「に」格と共起する動詞が明示されていない例も見られた。この表で得られた結果から、いくつかの例を取り出すと以下の例が確認できる。

23ありねよし 対馬の渡り 海中に(渡中尔) 幣取り向けて はや帰り来ね (卷一・六二 春日藏首老)

24岩代の 野中に立てる(野中尔立有) 結び松 心も解

表6:「中に」と共起する動詞(テキストの訓みに基づいて)^{注2)}

動詞/用例数	うち	なか
思ふ	3	0
あり	1	3
なる	1	0
燃ゆ	1	0
恋ふ	1	0
倦み怠る	1	0
簡(えら)ぶ	1	0
鳴く	0	4
包む	0	2
あり(縮約形)	0	1
立つ	0	1
立て置く	0	1
置く	0	1
送り置く	0	1
造り置く	0	1
取り向ける	0	1
なす	0	1
呼ぶ	0	1
生まる	0	1
護持す	0	1
定む	0	1
総計	9	21

けず 古思ほゆ (卷二・一四四 長忌寸奥麻呂)

25 海神は 奇しきものか 淡路島 中に立て置きて(中尔

立置而) 白波を 伊予に廻ほし… (卷三・三八八)

26 …沓をだに はかず行けども 錦綾の 中に包める(中

丹褰有) 斎ひ兒も 妹に及かめや 望月の 足れる面

わに… (卷九・一八〇七)

27 石上 布留の早稲田の 穂には出でず 心の中に(心中

尔) 恋ふるこのころ (卷九・一七六八 拔気大首)

23の「海中に」は「向ける」という動きの方向を示しており、

これも点的な「位置」を表している。24、25の「立てる」や27

の「恋ふる」はこれまで見てきた例の中にも見られた(3、

16) 動詞であるため、訓の判定もそれに従って良い。この四例

に対して、26の「包める」は「位置」と「範囲」のどちらも志

向できる動詞である。しかし、「範囲」の解釈をとった場合、「包

む」という動きが「錦綾の中」において行われるという理解に

なってしまうため文意が通らない。該当部については「斎ひ兒」

の「位置」を問題とする「錦綾のなか」と訓むのが妥当である

う。

また、これまで見てきたように、この傾向は「に」以外の格

助詞をとる例においても共通する。

28 なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と ちこ

ごちの 国のみ中ゆ(国之三中従) 出で立てる 富士

の高嶺は… (卷三・三一九 高橋虫麻呂)

29 いざ寝よと 手を携はり 父母も うへはなさがり さ

きくさの 中にを寝むと(中尔乎衽牟登)：

(卷五・九〇四 山上憶良)

30 現つ神 我が大君の 天の下 八島の中に(八嶋之中尔) 国はしも多くあれども 里はしも さはにあれども

も 山並の 宜しき国と： (卷六・一〇五〇)

31 櫛も見じ 屋内も掃かじ(屋中毛波可自) 草枕 旅行

く君を 斎ふと思ひて (卷十九・四二六三)

『新編全集』では、28、29が「なか」、30、31が「うち」と訓まれている。前の二例については、28が「富士の高嶺」がそびえ立つ起点となる「位置」を、29が「父母」に挟まれた「位置」で寝る子どもの様子をあらわしている点から「なか」と訓んで問題がない。後の二例については、31は「掃く」という動きの「範囲」をあらわしているため「うち」と訓んで問題ないが、30は「あり」という状態的な動詞が「位置」をあらわしているため「なか」の方が適当だろう。30を「なか」と改訓すれば、表6の「うち」と共起する「あり」の用例数が0になるため、「中」表記例に関しても両語と共起する動詞は完全に相補的な分布となる。

一方、これまで検討した『萬葉集』・記紀歌謡と比べて、続日本紀宣命には「④同類のものが多く存在する場を示し、そのあとである特徴をもつものを特にとりあげていう」(『古典』)という用法の「中」が多く確認できる。

32 四の王の中に(四王之中尔) 簡ひて君と為さむと謀りて、

(第十九詔 孝謙天皇)

33 又仲麻呂が家の物計ふるに、書の中に(書中尔) 仲麻呂と通はしける謀の文有り。(第三十詔 称徳天皇)

34 又仕へ奉る人等の中に(人等中尔)、自が仕へ奉る状に随ひて一二人等冠位上げ賜ひ治め賜ふ。(第六十一詔 桓武天皇)

32は「うち」、33、34は「なか」と訓まれているが、これらの例は全て複数の集合から一つを選択する性質のものである。このことは、集合内における特定物の「位置」に言及しているとも言え換えられる。34は「中に」と共起する動詞がないため解しにくいのが、「仕へ奉る人等」という集合から「一二人等」を選び、その対象の「冠位」を上げたと解釈できる。つまり、述語の「上げ賜ひ治め賜ふ」の前に「選ぶ」といった動きを補うことが可能であり、その「選ぶ」が「中に」と共起していると考えられる。そうなると、これらの例は32のように「うち」と訓まれているものも含めて、全ての例を「なか」と訓むのが自然だと思われる。

この意味をあらわす「なか」は『萬葉集』にもわずかながら確認できる。

35 やすみしし 我が大君の 敷きませる 国の中には(国中者) 都し思ほゆ (卷三・三三九 大伴四綱)

36 梅の花 咲けるが中に(開有之中尔) 含めるは 恋ひや隠れる 雪を待つとか(卷十九・四二八三 茨田王)

35は、新編全集では「くにのうち」と訓まれている。名詞「国」については「国内ことごと」(21)のような「うち」と共起す

る確定例がある。前接名詞から分析する従来の方法では「うち」と推定されるのは道理だが、本稿が問題にする「位置」と「範囲」の原則ではこのようには解せない。35は33のように内在する「選ぶ」という動きの結果、選ばれた「都」が偲げられると理解するべきである。先程検討した28も、歌全体の解釈を考える

と、「八島」に「国」や「里」が多く「ある」中で一つを選び出して述べる構造となっている。「国」も「都」も特定の「範囲」を示す名詞ではあるが、ここでは集合に対するその所属物として二者の関係が「選ぶ」という動きの対象として抽象化されている。このような「国」の捉え方は21とは明確に異なる。^{注23}一方で36は特定物の限定をあらわす動詞は見られないが、「梅の花」という集合から「含める（梅）」という一つが限定されている。以上のことから、この三例に関しても集合の中の一つに関する「位置」を問題としているため、「なか」と訓むのが妥当だろう。

37生ける代に 恋といふものを 相見ねば 恋の中にも

（恋中尔毛） 我そ苦しき （卷十二・二九三〇）

この歌については、『新編全集』では「こひのうち」、『新日本古典文学大系』では「こふるうち」、澤瀉久孝『萬葉集注釈』では「こひのなか」というように最近の注釈書でも訓が揺れており、一、で紹介した津之地（一九七二）でも問題にされている。『新編全集』が「世間の恋の中でも特にわたしの恋は苦しい」と訳しているのを見ると、一見32〜36のように「なか」と見るのが妥当に思える。しかし、そのように捉えた場合には、五句目の「我」に「私（の恋）」といった含意を読み取る必要

があり、訳し方に不自然な部分が見出せる。

この訳が生まれる背景には、係助詞「そ」が直前の「我」だけを強調しているという考えがあるように見受けられる。だが、「そ」の焦点範囲が直前の「承接成分」だけでなく「述語」にまで及ぶ例もあるという指摘^{注24}を鑑みると、このような強引な解釈にこだわる必要はないように思われる。ここでは、「苦しき」という状態が続いている一定の期間という意味で「うち」とするのが妥当である。^{注25}

このように考えていく場合には、次のような同一の動詞が「うち」「なか」両方を取る例の処遇も考えておく必要がある。

38川渚にも 雪は降れれし 宮の内に（宮裏） 千鳥鳴く

らし 居む所なみ （卷十九・四二八八 大伴家持）

39名児の海を 朝漕ぎ来れば 海中に（海中尔） 鹿子そ

鳴くなる あはれその鹿子 （卷七・一四一七）

40里中に（里中尔） 鳴くなる鶏の 呼び立てて いたく

は鳴かぬ 隠り妻はも （卷十一・二八〇三）

この三例は、先行研究の「開放性」「閉鎖性」の観点からすれば、38は「うち」、39、40は「なか」と訓み分けられる。一方で、動詞に着目するこれまでの観点からは、10のように「鳴く」という動きが行われる「範囲」と解するのが普通である。しかし、38が単に「千鳥」の動きに言及する一方で、39、40ではその動きを行う主体の存在に着目している点は注意が必要である。具体的な形式に則って言えば、38は「居む所」がないという根拠に基づいて「千鳥鳴く」という事態が「らし」という

形式によって説明されているが、残る二例は「なり」という助動詞を用いることで、「鳴く」という聴覚情報に基づき「鹿子」「鶏」の存在を認識する構造となっている。そのため、39、40については動詞が「鳴く」でも、例外的に「位置」をあらわす「なか」が使われていることが説明できる。

全ての例を取り上げることができなかったが、ここで見た範囲では共起する動詞の性質などから、「うち」と「なか」に関する訓み分けは可能であることがうかがえた。ここで、改めて四、で検討した仮説に立ち返ると、二語に付く格助詞「に」は存在、出現の場所をあらわすものとの場所をあらわすもの、着点をあらわすもの、方向をあらわすもので、それぞれ性質が異なっていることが明らかになった。そして、その違いが「位置」と「範囲」という二語の意味の違いに関連していることも確認できた。

七 おわりに

以上、『萬葉集』を中心とする上代文献における「うち」「なか」について、共起する語などに注目して見てきた。二語と格助詞「に」との関係は、「うちに」「なかに」が後の時代に接続助詞的な用法を持つ点などからして、多分に密接だったと考えられる。改めてその成果をまとめると、次の四点に集約できる。

- (1) 『萬葉集』には、日野（一九九七）などの先行研究が示す定義では説明が難しい「うち」「なか」がある。

- (2) 主に「に」格助詞と共起した例から、空間を意味する場合には、「うち」は「範囲」を、「なか」は「位置」を問題としている傾向が確認できる。

- (3) この傾向は、空間的用法以外の意味にも通じており、先行研究より多くの例に対して通用することから、より一般性を持つ二語の意味特徴と位置づけられる。

- (4) この傾向をもとにすると、これまでの定義では明確にできなかった「中」表記の訓みも明らかになる。

今回は「うち」「なか」においてその文法的機能を考察したが、その過程でいくつかの課題も見出された。特に、使い分けの根拠となった格助詞「に」が上代においてどのように使用されていたかは、論の妥当性に大きく関わるため考えていく必要がある。また、語彙史的な課題としては、「上」表記における「かみ」「うへ」や「下」表記における「しも」「した」についての関係などの調査も必要である。その他にも様々な課題が見出せるように思われるが、それらも含めて今後の課題としておきたい。

注

- 1 正宗敦夫編『類聚名義抄』（第一巻、第二巻、風間書房・一九五四年）

- 2 津之地直一「万葉集の「上」「中」「下」音訓義攷」（『愛知大学文学論叢』四十七巻・一九七二年三月・一頁～二一頁）

- 3 日野資純「心ノウチ」から「心ノナカ」へ―基礎語研究の一視点」（『佐藤茂教授退官記念 論集国語学』桜楓社、一九八〇年一月・五十九頁〜八十四頁）、日野資純『基礎語研究序説』（桜楓社・一九九一年九月・百五十三頁〜百九十九頁）、日野資純『古典文学の作品における「中」字の訓―ナカとウチの意味分析―』（『国語と国文学』七十四巻二号・一九九七年二月・一頁〜十五頁）
- 4 斎藤達哉『源氏物語』の「うち」と「なか」（『国学院大学大学院紀要（文学研究科）』二十六巻・一九九五年三月・一一八頁〜一九九頁）
- 5 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『補訂版 岩波古語辞典』（岩波書店・一九九〇年）
- 6 大野晋編『古典基礎語辞典』（角川学芸出版・二〇一一年）
- 7 この他に、語義未詳とされている「中弭」（三三）「中見刺」（二八三〇）や難訓歌に含まれる「奈可中次下」（三四一九）なども、「なか」の意味がどれほど見られるのか定かでないため、考察の対象としなかった。
- 8 表1の「一字一音」の用例には、「垣内」をあらわした「垣都」「垣津田」も含めた。これは「かき」は正訓字表記となっているが、「うち」の縮約形にあたる「つ」が一字一音表記となっているため、このようにした。
- 9 「裏」表記については、現代語のように「うら」と訓む可能性もあり得る。だが、そういった場合は、接頭語「うら」にあてている例や名詞「浦」にあてている例が多い。

- 10 誤読の可能性がある「Nのうら」「Nうら」の例は「磯の裏」（巻九・一七三五）のみであり、誤読の可能性が限りなく低いという意味で便宜的に確定例に加えた。調査した作品と出典については、日本語歴史コーパスに基づいて以下のものを用いている。奈良（『萬葉集』：新編全集、『続日本紀宣命』：北川（一九八二）、平安（『竹取物語』『古今和歌集』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『枕草子』『源氏物語』『和泉式部日記』『紫式部日記』『堤中納言物語』『更級日記』『大鏡』『讃岐典侍日記』：新編全集、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』：国文学研究資料館所蔵の正保版本（二十一代集）、鎌倉（『今昔物語集』『万丈記』『宇治拾遺物語』『十訓抄』『徒然草』『海道記』『建礼門院右京大夫集』『東関紀行』『十六夜日記』）とはさすがたり『保元物語』『平治物語』『平家物語』：新編全集、『新古今和歌集』：国文学研究資料館所蔵の正保版本（二十一代集）。日本語歴史コーパスの収録作品には、上代の『延喜式祝詞』や中古の『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』も含まれるが、本稿の立場からこれらの作品の例は取り除いた。尚、この数値は訓みが揺れる「中」表記も含まれるが、ここでは全体の傾向を見ることが目的であるため、それについては一旦許容する。
- 11 表の「あり（縮約形）」は後述の「葦が中なる玉小菅」

(19の例)にあたる。「なる」は「に＋あり」の縮約形と分析できるため、ここでは「なか」が「あり」と共起すると見なした。後の表7の「あり(縮約形)」も同様である。

12 [CH]で「キー」を「品詞・動詞」として前方共起1、2をそれぞれ「語彙素」「うち」「なか」、「語彙素」「に」とした。確定例、非確定例は目視で確認した。そのため、14「内には」などは含まれない。

13 日本語記述文法研究会『格と構文 ヴォイス』(くろしお出版・二〇〇九年十一月)。尚、古典語の格助詞「に」の機能については、小田勝『実例詳解古典文法総覧』(和泉書院・二〇一五年四月)などを参考にした。

14 田野順也『万葉集』における隔絶感の表現―中臣宅守歌の「山川を中にへなりて」をめぐる―(『同志社国文学』第六十六号、二〇〇七年三月・十五頁～二十四頁)
15 『日本国語大辞典 第二版』(小学館・二〇〇〇年～二〇〇二年)

16 森田良行『基礎日本語辞典』(角川書店・一九八九年五月)注16に同じ

17 中右実「空間と存在の構造」(『日英語比較選書⑤構文と事象構造』研究社出版・一九九八年十一月)

18 注15に同じ

19 小島憲之「万葉題詞のことば―「夜裏」「留女」考―」

(『上代文学』四十四卷・一九八〇年四月・一頁～六頁)

21 澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第五』(中央公論社・一九五九年・二十五頁)

22 調査方法については、注12と同様である。

23 この「国」の違いは、語彙的な意味の面からも説明できるかもしれない。澤瀉久孝は『萬葉集注釋 卷第一』(中央公論社・一九五七年・四十四頁)で「国は一定の行政区域をさすのみならず、土地、国土などの意にも用ゐる」(二番歌注釈)と指摘している。

24 勝又隆「語順から見た強調構文としての上代」―ソ―連体形」文について」(『日本語の研究』第五卷三号・二〇〇九年七月・一頁)など

25 なお、「うち」にしても「こひのうち」か「こふるうち」という問題が残ることになるが、それについては「中」の訓と関わらないため、今回は問題としない。

26 表5と表6の数値から、「鳴く」と共起する例は合計五例あることとなるが、ここに示されていない例は「夜中」(巻十・一九三七、巻十九・四一八〇)と共起する。「夜中」については、用例15において説明した通りである。

使用資料

・小島憲之・木下正俊・東野治之『新編日本古典文学全集

萬葉集①～④』(小学館・一九九四年～一九九六年)

・山口佳紀・神野志隆光『新編日本古典文学全集 古事記』

(小学館・一九九七年五月)

- ・小島憲之・直木考次郎・西宮一民・藏中進・毛利正守『新編日本古典文学全集 日本書紀①③』（小学館・一九九四年）
- ・北川和秀編『続日本紀宣命―校本・総索引』（吉川弘文館・一九八二年十月）
- ・国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス』（バーション2023）中納言バーション2.7.1) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chi/>（2023年6月11日確認）